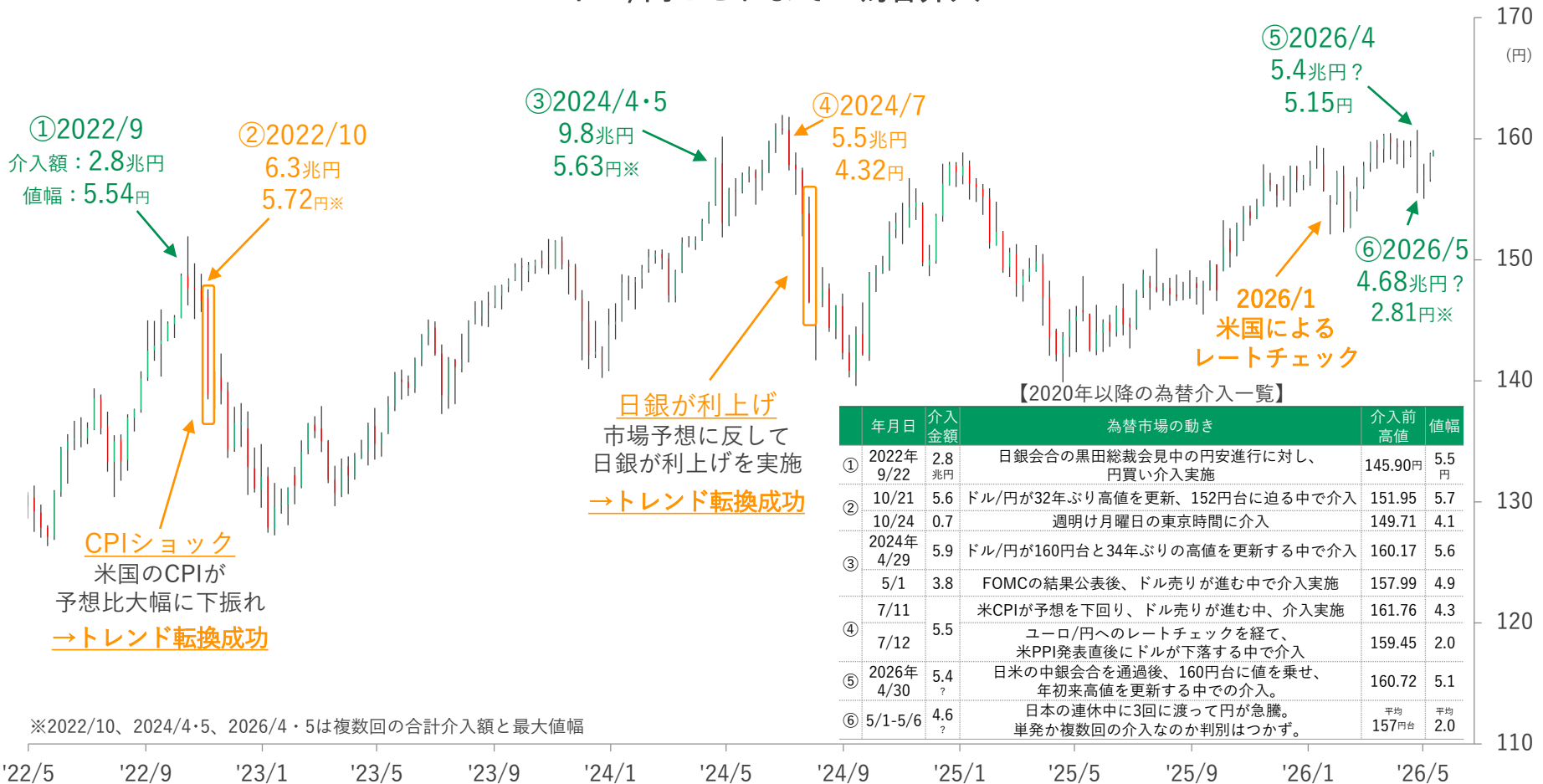


りそな経済フラッシュ

(単独為替介入の限界と協調介入リスク①)

- 単独介入は急激な円安に対する「時間稼ぎ」としては有効ながらも、トレンド転換に至るケースでは別途円高材料の存在が確認されている。
- 一方で、市場が最も警戒しているのは「協調介入」であり、1月の米国のレートチェックは大きく円高で反応。

1.ドル/円とこれまでの為替介入



出所：Bloomberg

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることがあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。

りそな経済フラッシュ

(単独為替介入の限界と協調介入リスク②)

2026年 5月 19日
 りそなHD 市場企画部
 担当：苅谷

新NISAやデジタル赤字、金利差などの円安要因が単独介入の効果を抑制する一方で、市場が最も警戒するのが協調介入である。過去にはドル/円のトレンドを大きく転換した例もあり、市場参加者に強く意識されている。

2. 単独の介入では止められない背景

新NISAによる対外投資やデジタル赤字、貿易赤字など、構造的な円安売り圧力が介入効果を抑制。

【構造的な円売り圧力】

	年間
デジタル赤字 (恒常的な円売り)	約 7.1兆円
新NISAを通じた 海外株買い (個人マネーの海外流出)	約 6.8兆円
貿易赤字 (実需の円売り)	約 2.6兆円
日米金利差 (キャリートレードの動機)	10年 約 1.8%

他にも…人口減少の速度や潜在成長率の低さなど

3. 最も警戒される協調介入

市場が最も警戒しているのは協調介入。過去にドル/円のトレンド転換例がある為、足元でも日米協調介入が強く意識されている

【過去の協調介入】

赤●：ドル売り介入 白○：ドル買い介入



→単独介入は「時間稼ぎ」、協調介入は「トレンド転換」

出所：Bloomberg

◎注意事項

当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることがあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。